

22号

山口大学人文学部
異文化交流研究施設ニューズレター

2022

情報社会と人文学

速水 聖子

(はやみ せいこ)

人文学部副学部長

コロナ禍に襲われた2020年、全国の学校現場において、オンラインでどのように授業を継続し教育機会を維持できるか、教員が対応に追われたことは記憶に新しい。突如として現れた（ように見えた）ZoomやWebexなどのミーティングアプリが当たり前のものとなり、個人的にも非対面授業の可能性やメリットを知る機会となった。リモート授業の例からも、IT技術の発展がもたらす「情報化」によって現代の私たちの生活が支えられ、多くの利便性がもたらされていることは明らかであり、したがってIT活用術を身につける必要があるとすることに異論はない。一方で、世の中に溢れる情報をどのように活用するのが社会にとって望ましいのか、個人はどのように情報社会と向き合うべきか、は依然大きな課題である。

日本の情報学を牽引してきた西垣通によれば、「情報」には①客観世界を普遍的にとらえる知（客観知）②主観世界において再帰的に意味のある知（主観知）という2つの異なる側面がある。その上で西垣は、IT技術やAIの発達によって、機械・科学的な知としての客観知が感情や意味主体として人間が担う主観知を凌駕する、あるいは収斂するものではないとして、短絡的なAI万能論や人間不要論を唱えることに警鐘を鳴らしている。つまり、様々なメディアによるコミュニケーションを通して人間が主体的に主観知と客観知を架橋することの重要性を説いている（西垣通『AI原論』講談社 2018）。

時代と共に、技術革新によるメディアの多様化によって情報の伝え方は変わってきた。同時に、人々は伝えられる情報の価値を共有することによって、お互いの価値観や意見の相違を超えて異なる他者を理解し、集団や社会を構成してきた。その営みにおいて、コミュニケーションは情報をつなぎ共有するものとして社会を形作る基礎であるといえよう。メディアによる情報の共有が、いわゆる世論や公論として社会を動かす力にもなってきたのである。

翻って、個人が全世界につながる現在のインターネットは、健全なコミュニケーションのためのツールになっているのだろうか。確かに「アラブの春」ではSNSが民主化運動に貢献したという見方もあるが、現在のあまりにも過剰な情報の氾濫は、その意味を適切にコミュニケーションする余裕を奪う面もある。すなわち、ネット上では情報を多様な他者と共有するよりも、自己と同じ意見集団や自己に有益であるものにアクセスは偏る傾向があり、人々をつなぐはずの技術が分断や排除・攻撃の手段となる現状も無視できない。また、AI等を活用してビッグデータを統計的に処理し、結果を導き出すことは私たちの生活にとって有用でもあるが、それが100%正しく、全ての人々にとって望ましいものとは限らない。何より、現代における社会課題（例えば環境問題や少子高齢化等）は全ての人々に共通するリスクであるものの、個人の置かれた立場や感情・価値観によって認識は異なり、主観的な意味の問題として存在する。文化的多様性や多元的価値を重視する現代社会において、社会課題に対する絶対の正解はないに等しいからこそ、お互いの情報の意味を共有し、どこかに合意点を導き出す努力をしなければならない。現代の開かれた情報技術は、そのためのツールとして活用されなければならないといえる。

AI研究に中枢で携わってきた西垣からの人間の主体性を重視する主張は、情報社会を超えてSociety 5.0とも称される現在にあって、さらなる人文学的知の役割を再認識させてくれるものである。